

立正安国論

沙門 日蓮勤ふ

旅客来つて嘆いて曰く、
近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・
疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。
牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招く
の輩既に大半に超え、之を悲しまざる族
敢へて一人も無し。

然る間、或いは「利剣即是」の文を専らに
して西土教主の名を唱へ、
或いは「衆病悉除」の願を持つて東方如来の
経を誦し、

或いは「病即消滅不老不死」の詞を仰いで、
法華真実の妙文を崇め、
或いは「七難即滅七福即生」の句を信じて、
百座百講の儀を調へ、

有るいは秘密真言の教に因りて五瓶の水を灑ぎ、
有るいは坐禅入定の儀を全うして、空観
の月を澄まし、

若しくは七鬼神の号を書して千門に押し、若
しくは五大力の形を図して万戸に懸け、
若しくは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀
を企て、

若しくは万民百姓を哀れんで、国主国宰の
徳政を行ふ。

然りと雖も、唯肝胆を摧くのみにして、
弥飢疫逼り、乞客目に溢れ死人眼に満て
り。屍を臥せて觀と為し、尸を並べて橋
と作す。

立正安国論

僧日蓮が(経文に基づいて)災難の原因と
対策について)考えた

旅人が来て嘆いていう。
近年(正嘉元年のころ)から(文応元年の)今日にいたる四箇年の
間に、大地震や大風などの天変地異が続き、飢饉が起り、疫
病が流行して、災難が天下に満ち、広く地上にはびこっています。
そのために牛や馬はいたるところで死んでおり、骸骨は路上に充
満し、すでに大半の人びとが死に絶えて、この悲惨な状態を悲し
まない者は一人もおりません。

そこである者は「苦悩と罪業を滅ぼす利剣は弥陀の名号を称
えることである」という中国浄土教の善導和尚の般舟讚の文を
信じて、ただひたすら西方浄土の教主阿弥陀仏の名ばかりを称え、
ある者は「わが名号を一たび聞けばもろもろの病はすべて除か
れ身も心も安楽となる」という東方薬師如来の誓願を信じて、そ
の経文を誦し、

ある者は法華経薬王品の「この経はこの世界の人の病の良薬であ
るから、病める人がこの経を聞けば、病は消滅し、不老不死とな
ろう」という言葉を仰いで、法華経を真実の妙文と崇め、
ある者は「般若経を講讀すれば七難は消えて七福が生ずるであ
ろう」という仁王般若経の句を信じて、百人の僧がこの経を講ず
るといふ仁王会の儀式を営み、

またある者は秘密真言の教えによつて五つの瓶に水を注いで災難
を除く祈禱を行ない、
ある者は坐禅をして精神の集中をはかり、すべてを空と観じて苦
悩から逃れようとし、

またある者は七鬼神の名を書いて門ごとに貼つたり、
ある者は五大力菩薩の形を描いて家ごとにかけたり、
ある者は天地の神々を拜んで四角四堺の祭という災難を除く祈
りを四方の神に捧げたり、

また為政者は民衆の窮状を哀れんで、いろいろな徳政を行なつて
おります。

しかしながら、ただ心を砕くだけで、飢饉や疫病はますます
激しくなるばかりで、目につくものは物乞い人と死者ばかりで
す。その死骸は積みあげられて物見台のようであり、また
水に並べられて橋のようであります。

観れば夫れ二離壁を合はせ、五緯珠を連ぬ。

三宝世に在し、百王未だ窮まらざるに、此の世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。

是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤りに由るや。

主人の曰く、

独り此の事を愁へて胸臆に憤悱す。

客来つて共に嘆く。屢談話を致さん。

夫れ出家して道に入る者は、法に依りて仏を期するなり。

而るに今神術も協はず、仏威も驗無し。具に当世の体を觀るに、愚にして後生の疑を發す。

然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。

倩微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く惡に帰す。

故に善神国を捨てて相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔来り鬼来り、災起り難起る。

言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。

客の曰く、

天下の災、国中の難、余独り嘆くのみに非ず、衆皆悲しめり。

今蘭室に入つて、初めて芳詞を承るに、神聖去り辭し、災難並び起るとは、何れの經に出でたるや。其の証拠を聞かん。

思いめぐらしてみると、天には日月が昼夜を照らし、木星・火星・金星・水星・土星の五つの惑星は玉を連ねたように規則正しく運行し、

地上では仏法僧の三宝が存在し、八幡大菩薩の百代の天皇を守護するという誓いの通りに帝王はその座にあり、しかし、どうしてこの世は衰え、仏法も王法もその威力を失い、すたれてしまったのでしょうか。

これはどのような禍によって生じ、またどのような誤りが原因となっているのでしょうか。

主人が答えていう。

自分も独りこのことを心配して、深く胸中に思い悩んでいました。あなたがお見えになり、同じように嘆かれるので、しばらく語り合おうではありませんか。

そもそも、世俗の恩愛を断つて出家し、仏道に入るのは、仏の教えによつて仏になりたいからです。

しかしながら、現実には神への祈りもかなわず、仏の威力も現われません。細かく現状を觀察すると災難は増すばかりで、何の効験もないので、未来の成仏も疑われてなりません。

そこで私はただ天を仰いでは出家の目的が失われたことを恨みに思い、地に伏しては深い憂いと絶望に沈んでおります。

少し管見を述べさせて頂きたく、經文をひもといてみますと、この災難の原因は、世の中のすべての人びとが正しい教えに背いて悪法邪法に帰依したためであります。

だから諸天善神はこの国を捨てて天上に去り、正法を広める聖人も去つて還つてこないから、その隙に乗じて悪魔や惡鬼が来襲し、災難が次々起こるのです。

このことを言わずにはおられません。恐れなければならぬことなのです。

客は尋ねていう。

近年のうち続く天下の災害や国じゅうの災難については、ただ自分一人だけが嘆いているのではなく、すべての人びとが嘆き悲しんでいるのです。

いま貴僧を尋ね、初めて尊いお言葉を承ったところ、善神や聖人がこの国を去つていなくなつたために、災難が次から次へ起こるといふのはどのお經に説かれているのでしょうか、その証拠をお聞きしたい。

主人の曰く、
其の文繁多にして、其の証弘博なり。

金光明経に云く、
其の国土に於いて此の経有りて雖も、未だ嘗て流布せず。

捨離の心を生じて聴聞せんことを樂はず。亦供養し、尊重し、讚歎せず。

四部の衆、持経の人を見て、亦復尊重し、乃至供養すること能はず。

遂に我等及び余の眷属、無量の諸天をして、此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流を失ひ威光及び勢力有ること無からしむ。

悪趣を増長し、人天を損滅し、生死の河に墜ち、涅槃の路に乖かん。

世尊、我等四王並に諸の眷属及び葉叉等、斯の如きの事を見て、其の国土を捨てて擁護の心無けん。

但我等のみ是の王を捨棄するに非ず。必ず無量の国土を守護する諸大善神有らんも、皆悉く捨去せん。

既に捨離し已りなば、其の国に当に種々の災禍有つて、国位を喪失すべし。

一切の人衆皆善心無く、唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有り。互に相讒諂し、枉げて辜無きに及ばん。

疫病流行し、彗星数出で、兩日並び現じ、薄蝕恒無く、黑白の二虹不祥の相を表し、星流れ、地動き、井の内より声を発し、暴雨・悪風時節に依らず。

常に飢饉に遭ひて苗実も成らず。

主人は答えていう。
その経文は非常に多く、その証明する根拠は広く一切経にわたつて見られます。

金光明最勝王経四天王護国品には次のように説かれています。
あるとき四天王が仏に申しあげるに、
「ある国王があつて、その国にはこの経が伝わっているけれども、少しも広まつていない。

その国王も人民も、この経を捨てて顧みようとせず、聴こうともしない。ましてこれに供養したり、尊重したり、讚歎しようともしない。

人々はこの経を持つ人を見て、尊んだり重んじたり更に供養しようともしない。

だから我ら四天王や、われらの従者や多くの天の神々は、この尊くありがたい妙法の教えを聞くことができないので、われらの身を養う正法の甘露の法味を受けることができず、正法の流れに浴することもできず、そのためわれらの権威や勢力もなくなつてしまふ。

そうすると、この国には地獄、餓鬼、畜生、修羅の四悪趣が増して、人間界や天上界は損ない減少し、すべての人びとは無明と苦悩の世界に落ちて、すなわち悟りへの路に背くことになる。

世尊よ、われら四天王やその従者や夜叉などは、このような国王や人民の不信のありさまを見ては、その国土を捨て去つて、守護しようとする心も無くなつてしまふのです。

ただ我らだけがこの国王を見捨てるだけではなく、必ず多くの国土を守護する諸天善神がいたとしても、みなすべてその国を捨て去つてしまふであらう。

すでに我ら護国の諸天善神が、みなその国を捨て去つてしまえば、その国にはまさに様々な災難が起こり、国王はその位を失うであらう。

そして、すべての人民は道徳心や宗教心などの善心を失い、ただ縛つたり、殺しあつたり、瞋り諍つたり、おたがいに諍つたり、諂つたり、罪のない者を罪に陥れるようなことをするであらう。

疫病は流行し、彗星がしばしば出て、太陽が二つ並び現われたり、日蝕や月蝕も一定せず、黑白二つの虹が出て不吉の相を表わし、星が流れたり、地震が起き井戸の中から異様な声が聞こえたり、季節はずれの暴風雨が襲うであらう。

常に飢饉が続き作物も実らず。

多く他方の怨賊有りて、国内を侵掠し、人民諸の苦悩を受け、土地に所樂の処有ること無けん。已上。

大集経に云く、

仏法実にに隠没せば、鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。

当の時虚空の中に大なる声ありて地に震ひ、一切皆遍く動ぜんこと、猶水上輪の如くならん。

城壁破れ落ち下り、屋宇悉く圯れ拆け、樹木の根・枝・葉・華葉・菓の菓尽きん。

唯淨居天を除いて、欲界の一切処の七味・三精气損滅して余有ること無けん。

解脱の諸の善論当の時に一切尽きん。生ずる所の華菓の味希少にして、亦美からず。

諸有の井泉池も一切悉く枯涸し、土地悉く鹹鹵し、敵裂して、丘澗と成らん。

諸山皆焦燃して、天龍も雨を降らさず。苗稼皆枯死し、生ふる者皆死れ尽きて、余草更に生ぜず。

土を雨し、皆昏闇にして、日月明を現ぜず。四方皆亢旱し、数諸の悪瑞を現ぜん。

十不善業道、貪瞋痴倍増し、衆生の父母に於ける、之を觀ること獐鹿の如くならん。

衆生及び壽命・色力・威樂減じ、人天の樂を遠離して、皆悉く惡道に墮ちん。

是の如き不善業の惡王・惡比丘我が正法を毀壞して、天人の道を損滅せん。

さらに外国から多くの賊が（頻繁に）攻めてきて国内を侵略し、人民は多くの苦しみを受けて、国じゅうどこにも安心して楽しく住む所はなくなるであろう」と。（以上、經文）

大集経法滅尽品には次のように説かれています。

「仏法が滅びようとする時は、僧はみな鬚や頭髮や爪を伸ばして、僧としての行儀を失い、戒律も乱れてしまうであろう。

その時、虚空に大きな声が鳴りひびいて、大地を震わせ、あらゆるものは水車のように回り動くであろう。

城壁は崩れ落ち、人家はことごとく壊れ、樹木の根も枝も葉も花びらも果実も、それらのもっている薬味も尽きはててしまうであろう。

ただ、ふたたび迷いの世界に戻ることに悟りを得た聖者の住むという淨居天を除いては、この世界のあらゆる人々を養う七味や三精气は残らず消え失せてしまうであろう。

また悟りを得るための正しい教えを述べた多くの書物もすべて消滅するであろう。また、大地に生ずる植物の花や果実も少なくなり、その味もまざるであろう。

すべての井戸も泉も池も涸れはてて、土地は塩気を含んだ不毛の地となり、ひび割れて丘や澗となるであろう。

すべての山はみな燃えあがり、天の竜は一滴の雨も降らさないであろう。穀物の苗はみな枯れ、その他の作物もすべて枯れはてて、雑草すら生えないであろう。

土が降って昼でも暗く、太陽も月もその明るさを失ってしまふであろう。あらゆる処でひでりに悩まされるなど、しばしばいろいろの凶兆が現われるであろう。

人びとの間には十種の悪業、ことに貪欲・瞋恚・愚痴の三毒がますます倍増して、人びとは父母に対してさえ、人に追われて自分だけ助かろうとする臆病な鹿のように不孝の罪をおかすようになる。

人びとの数も、壽命も、体力も、威力・樂も減って、人間や天上の楽しみが遠ざかって、みなことごとく地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮ちるであろう。

このような十種の悪業の王と僧とが、わが正法を毀壞つて、人間や天上の道を損ない滅ぼすであろう。

諸天善神、王の衆生を悲愍する者、此の濁悪の国を棄てて、皆悉く余方に向はん。已上。

仁王経に云く、

国土乱れん時は先ず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る。

賊来つて国を劫かし、百姓亡喪し、臣・君・太子・王子・百官共に是非を生ぜん。

天地怪異し、二十八宿・星道・日月時を失ひ、度を失ひ、多く賊の起ることあらん。

亦云く、

我今五眼をもつて明かに三世を見るに、一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍へしに由りて、帝王主と為ることを得たり。

是れを為て一切の聖人・羅漢、而も為に彼の国土の中に来生して、大利益を作さん。

若し王の福尽きん時は、一切の聖人皆為れ捨て去らん。若し一切の聖人去る時は、七難必ず起らん。已上。

薬師経に云く、

若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時、所謂人衆疾疫の難・佗国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿変怪の難・日月薄蝕の難・非時風雨の難・過時不雨の難あらん。已上。

仁王経に云く、

大王、吾が今化する所は、百億の須弥、百億の日月あり。一一の須弥に四天下有り。

其の南閻浮提に、十六の大国、五百の中国、十千の小国有り。其の国土の中に、七の畏るべき難有り。

そうなれば諸天善神も本来王が衆生を愍れみ救おうとすべきこの濁り乱れた悪国を捨てて、みなことごとく他の方へ去ってしまうであろう」と。(以上、経文)

仁王経の護国品には次のように説かれています。

「国土が乱れる時は、先ず悪鬼神が乱れる。悪鬼神が乱れ跳梁跋扈するとそのため万民も乱れてしまう。

外国から賊が攻め寄せて国をおびやかし、そのために人々は命を失う者が多く、臣民・君主・太子・王子・多くの役人の間に争いが起こる。

天地の間に怪しい現象が現われ、二十八の星座の位置や、星や月や日の運行が不規則になり節度を失い、内乱が各地で起こり賊が横行するであろう」と。

また**仁王経の受持品**には次のように説かれています。

「われ今、仏の眼をもつて三世を見るのに、すべての国王は、みな過去の世に五百の仏に仕えた功德によって、現在に帝王国主となることのできたのである。

さらにこの功德によって、すべての聖人や阿羅漢がその王の国土に生まれてきて、その国のために大いなる利益を与えてくれるであろう。

しかし、王の積んだ功德が尽きる時には、すべての聖者はことごとく国を捨て去るであろう。もしすべての聖者が去ってしまうならば、その時その国には必ず七つの難が起こるであろう」と。(以上、経文)

薬師経には次のように説かれています。

「王族や国王などによって国に災難が起こる時は、それは国民の間に疫病が流行する難、外国から侵略される難、国内の反乱の難、星の運行が変異する難、日蝕や月蝕で太陽や月の光が失われる難、時ならぬ風雨の難、早魃の難があるであろう」と。(以上、経文)

仁王経の受持品には次のように説かれています。

「大王(波斯匿王)よ、私(釈尊)がいま教化する範囲には百億の世界がある。各世界にはそれぞれ太陽があり、月があり、須弥山があり、その四方には四つの洲がある。

そのうち南方の閻浮提洲には十六の大国があり、五百の中国、一万の小国があるが、これらの無数の国には七つの恐るべき難がある。

一切の国王、是れを難と為すが故に。云何なるを難と為す。

日月度を失ひ、時節返逆し、或いは赤日出で、黒日出で、二三四五の日出で、或いは日蝕して光なく、或いは日輪一重二三四五重輪現するを一の難と為すなり。

二十八宿度を失ひ、金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・彗星・南斗・北斗・五鎮の巨星・一切の国主星・三公星・百官星、是の如き諸星各変現するを二の難と為すなり。

大火国を焼き、万姓焼き尽し、或いは鬼火・龍火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん。是の如く変怪するを三の難と為すなり。

大水百姓を漂没し、時節反逆し、冬雨ふり、夏雪ふり、冬の時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水・黒水・青水を雨らし、土山・石山を雨らし、沙・礫・石を雨らし、江河逆に流れ、山を浮べ、石を流す。是の如く変ずる時を四の難と為すなり。

大風万姓を吹き殺し、国土・山河・樹木一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん。是の如く変ずるを五の難と為すなり。

天地・国土亢陽し、炎火洞燃して百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して万姓滅尽せん。是の如く変ずる時を六の難と為すなり。

四方より賊来りて国を侵し、内外の賊起り、火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて、百姓荒乱し、刀兵劫起らん。是の如く怪する時を七の難と為すなり。

大集経に云く、若し国王有って、無量世に於いて施戒恵を

すべての国王はこの難を恐れている。その恐るべき七つの難とは、

日月が順行せず節度を失い寒暑の時節が逆になり、赤い太陽が出たり、黒い太陽が出たり、二つ三つ四つ五つと太陽が出たり、あるいは蝕けて太陽に光がなくなったり、あるいは一重、二重、三重、四重、五重と太陽が重なって現われたりするのが第一の難である。

二十八の星座の運行が狂い、金星や彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・彗星・南斗・北斗・五鎮の巨星・一切の国主星・三公星・百官星など、さまざまな星がいろいろ変わった現われ方をするのが第二の難である。

大火災が国じゆうを焼き尽くし、万民がごとごとく焼死したり、あるいは鬼の起こす火、竜の降らす火、落雷のために起こる火、山神の起こす火、人による火、樹から生ずる火、賊の放つ火などがあるだろう。この様な奇々怪々な火災が第三の難である。

大水が出て万民を溺れさせたり、気候が狂って冬に雨が降り、夏に雪が降り、冬に突然雷が落ちたり、六月の暑中に氷や霜や雹が降ったり、赤い水、黒い水、青い水が降ったり、土の山や石の山が降ってきたり、砂や礫や石が降ったり、河が逆流したり、山を浮かべ、石が流れたりするような水の異変が生じるのが第四の難である。

大風が吹いて万民を殺し、国土・山河樹木が一時に水没し、時ならぬ大風や、黒い風、赤い風、青い風、暴風、竜巻、火のように熱い風、雨の冷たい風などが吹き荒れるのが第五の難である。

天地国土が大旱魃で、炎熱が地下にまで浸透して、あらゆる草は枯れ、五穀も実らず、土地は焼けて、そのために万民は死に絶えてしまう。この様な変異が第六の難である。

四方から賊が攻めてきて国を侵略し、国内外に賊がの反乱が起こり、大火や大水、暴風に乗ずる賊や、鬼の賊が横行して、万民は極度に荒れずさんで、ついに世界中に大戦乱が起こるのである。これが第七の難である」と。(以上、経文)

大集経護法品には次のように説かれています。

「若し国王有って無量の過去世に、布施や持戒や智恵

修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種多る所の無量の善根悉く皆滅失し、其の国に當に、三の不祥事有るべし。

一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神悉く之を捨離せん。其の王教令すれども、人随従せず。常に隣国の為に侵嬖せられん。

暴火・横に起り、悪風雨多く、暴水増長して人民を吹漂し、内外の親戚其れ共に謀叛せん。其の王久しからずして當に重病に遇い、寿終るの後は大地獄の中に生ずべし。乃至、王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復是の如くならん。已上。

夫れ四経の文朗かなり。万人誰か疑はん。

而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄りに邪説を信じて正教を弁へず。故に天下世上、諸仏衆経に於いて捨離の心を生じ、擁護の志無し。仍て善神・聖人国を捨てて所を去る。是を以て悪鬼・外道災を成し、難を致すなり。

客色を作して曰く、後漢の明帝は金人の夢を悟つて、白馬の教を得、

上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す。

尔しより来上一人より下万民に至るまで、仏像を崇め、経卷を専らにす。

然れば則ち、叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道、仏経星の如く羅り、堂宇雲の如く布けり。

を修行して、その功德によつて、現世に国王と生まれても、仏法が滅びようとするのを見て、これを見捨てて守護しないならば、過去世に積んだ無量の功德もことごとくみな消滅して、その国には三つの不吉なことが起こるのであろう。

一に飢饉、二に戦乱、三に疫病である。すべての善神はその国を捨て去るであろう。王は命令しても人々は従わない。つねに隣国から侵略されるであろう。

大火が頻発し、悪風や大雨が重なつて、大洪水で人民は溺れ死に、王の一族から謀叛が起こるであろう。王はやがて重病に罹り、死後は大地獄に墮ちるであろう。王だけでなく、王妃も太子も大臣も将軍も、その他さまざまの官職にある者も、みな同じくこの苦しみを受けるであろう」と。(以上、経文)

右にあげた金光明最勝王経、大集経、仁王経、薬師経の四経の文は、災難の原因が正法に背いた為であると説かれて、明らかなであります。すべての人が疑わないでしよう。

ところがこの事が解らず煩惱に惑わされている人は、妄りに邪説を信じて、正しい教えをわきまえない。そのため世の中の人々は、多くの仏や経を捨てて、正法を護ろうとする志がありません。それによつて善神や聖人が国を捨て去つてしまい、その隙に乗じて悪鬼や邪説を説く輩が災難を起こすのであります。

客は大いに怒り、顔色をかえていう。

中国では後漢の明帝が金色に輝く尊い姿の人の夢を見て、使者を遣わして、白馬に経典や仏像をのせて中国に向かう摩騰迦・竺法蘭の二人の高僧に出会い、そして白馬寺を建て、中国仏教の拠点としたのです。

日本では聖徳太子が仏教に反対する物部守屋を成敗して、天王寺を建て、日本仏教興隆の基礎としました。

それ以来、上は天皇から下は一般庶民にいたるまで、すべての人びとが仏像を崇め、経卷を尊ぶようになったのです。

それゆえに比叡山、奈良、園城寺、東寺をはじめ、さらには日本全国いたる所で経典は星のように集められ、多くの寺院仏閣が雲のように建てられました。

驚子の族は則ち驚頭の月を觀じ、鶴勒の流は亦鷄足の風を伝ふ。誰か一代の教を編して三宝の跡を廃すと謂わんや。若し其の証有らば、委しく其の故を聞かん。

主人諭して曰く、
仏闍菴を連ね、經藏軒を並ぶ。僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。崇重年旧り、尊貴日に新なり。但し法師は諂曲にして人倫に迷惑し、王臣は不覺にして邪正を弁ずること無し。

仁王經に云く、
諸の悪比丘、多く名利を求め、国王・太子・王子の前に於いて、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。

其の王別へずして、此の語を信聴し、横に法制を作つて仏戒に依らざらん。是を破仏・破国の因縁と為す。已上。

涅槃經に云く、
菩薩、悪象等に於いては心に恐怖すること無かれ。悪知識に於いては怖畏の心を生ぜよ。悪象の為に殺さるるも三趣に至らず。悪友の為に殺さるれば必ず三趣に至る。已上。

法華經に云く、
悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。
或いは阿練若に、納衣にして空閑に在つて、自ら眞の道を行ずと謂つて、人間を輕賤する者有らん。

利養に貪著するが故に、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん。乃至、常に大衆の中に在つて、我等の過を毀らんと欲して、国王・大臣・婆羅門・居士及び

舍利弗の一門は智慧を磨いて仏の眞実の教えを学び、迦葉の門流は鷄足山の教風を伝えています。誰が釈尊一代の教えを衰退させ、仏法僧の三宝の跡を絶やしたといわれるのでしょうか。その証拠があるならば、くわしくお聞きしたいものです。

主人は客を静かに諭していう。
たしかにあなたの言われるように、寺塔は菴をつらね、經藏も軒を並べています。能化の僧は竹や葦の如く、所化の伴侶は稻や麻の如く大勢います。信者の帰依尊崇も変わりません。しかし、それはただ表面上であつて、その内実は、僧侶は諂い邪で、人を惑わし、国王も万民も愚かで、その正邪を見分けることができません。

仁王經の囑累品には、次のように説かれています。
「多くの悪僧たちがいて、自己の名誉や利益を得ようとして、国王や太子や王子などの権力者に近づいて、正法を破り、国を滅ぼすような自分勝手な間違つた教えを説くであらう。

その王たちは正邪を見分けることができず、その言葉を聞いて信じ、勝手な法律や制度を作り仏の戒めに背くであらう。これが仏法を破り、国を滅ぼす原因となるのである」と。(以上、經文)

涅槃經の高貴徳王品には、次のように説かれています。
「菩薩たちよ、悪象などに対しては恐怖する事は無い。しかし、悪師に対しては畏れなければならない。なぜならば、悪象に殺されても地獄・餓鬼・畜生の三つの悪所に落ちることはないけれども、悪師に帰依すれば必ず三悪道に落ちるからである」と。(以上、經文)

法華經の勸持品には次のように説かれています。
「悪世の僧たちは、よこしまな智慧と媚び諂う心を持ち、まだ覺りを得ないのに覺つたと思ひ、驕りたかぶりの心で満ちているであらう。
彼らはまた人里はなれた静かな場所、粗末な袈裟を身にまとい、自分は眞の道を修行していると思つて、人びとを見くだすであらう。

利養にとられるために、在家の人たちに法を説いて、世に尊敬されること六つの超人的な力を具えた聖者のようであらう。(中略)
彼らはつねに大衆の中にあつて、私たち正法を弘める者を誇らうと思ひ、国王や大臣や婆羅門(祭祀者)や長者や

余の比丘衆に向つて、誹謗して我が悪を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂はん。濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。

悪鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん。濁世の悪比丘は、仏の方便随宜所説の法を知らず。悪口して顰蹙し、数数擯出せられん。已上。

涅槃經に云く、我涅槃の後、無量百歳に、四道の聖人悉く復涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於いて、当に比丘有るべし。

像を持律に似せ、少かに經を誦誦し、飲食を貪嗜して其の身を長養し、袈裟を着すと雖も、猶獵師の細めに視て徐ろに行くが如く、猫の鼠を伺ふが如し。

常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし、内には貪嫉を懷かん。唾法を受けたる婆羅門等の如し。

實には沙門に非ずして沙門の像を現はし、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。已上。

文に就いて世を見るに、誠に以て然なり。悪侶を誡めずんば、豈善事を成さんや。

客猶憤りて曰く、明王は天地に因つて化を成し、聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の帰する所なり。

悪侶に於いては、明王信ずべからず。

聖人に非ずんば賢哲仰ぐべからず。

他の僧たちに向かつて、私たちの悪行を言いたて、邪見の人であり、異端の説を説く者であると非難するであろう。世の中が乱れ濁つてくると、さらに多くの恐ろしいことがあるう。

悪鬼が彼らの身に入つて、私たちを罵り辱しめるであろう。濁世の悪僧たちは、仏の方便の教えが相手の能力に応じて説かれたことを知らずにそれに執着して、真実の教えを弘める私たちを眉をひそめて悪口し、しばしば追い出そうとする」と。(以上、經文)

涅槃經の如來性品にも次のように説かれています。

「私(仏)の入滅の後、はかりしれない時間を経て、四つの悟りの段階に達した聖者たちもすべて入滅してしまつて世に現われぬ。正法が消滅して、形ばかりの仏法が残る像法の時代にも、僧と称する者がいるであろう。

彼らは形だけ戒律を守っているように見せ、わずかばかり經を読み、ただ飲み食いに執着しその身を養い、袈裟はつけているけれども、獵師が細目に視てそつと獲物に近づくように、また猫が鼠をうかがうように、世渡りをする。

そして、この様に言うであろう。自分はすべての煩惱を断ち切つた阿羅漢の境地に達していると。外見は聖者のように装っているけれども、内面は貪りと嫉みの心を懷いている。ちやうど無言の行をして悟り澄ました婆羅門などのようである。

實は出家でもないのに出家の像をし、よこしまな考えがさかんで、正法を謗るであろう」と。(以上、經文)

これらの經文から今の世の中を見ますと、まさに今の仏教界もこの通りであります。悪僧を誡めないで、どうして善いことができましようか。

客はそれでもまだ憤つて、次のようにいう。

賢明な帝王は天地を貫く道理にしたがつて万民を教化し、聖君は正しいことと間違っていることとの道理をわきまえて世を治めます。今の世の僧侶は国じゅうの人びとの帰依するところでありませぬ。

もし貴僧のいわれるように法を破り国を破る悪僧であれば、賢明なる帝王が信するはずがありません。

また聖君でなければ賢人・哲人といわれる人びとが仰ぐはずがありません。

今賢聖の尊重せるを以て、則ち龍象の輕からざるを知る。何ぞ妄言を吐いて、強ちに誹謗を成す。誰人を以て悪比丘と謂うや。委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然といふもの有り、選択集を作れり。則ち一代の聖教を破し、遍く十方の衆生を迷はす。

其の選択に云く、道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、而も聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文。初に聖道門とは、之に就いて二あり。

乃至、之に准じて之を思ふに、応に密大及以実大を存すべし。然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論、此等八家の意正しく此に在るなり。

曇鸞法師の往生論の注に云く、謹んで案ずるに龍樹菩薩の十住毘婆沙に云く、菩薩阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一は難行道、二は易行道。此の中の難行道とは、即ち是れ聖道門なり。易行道とは即ち是れ浄土門なり。

浄土宗の学者、先ず須らく此の旨を知るべし。設ひ先に聖道門を学べる人と雖も、若し浄土門に於いて、其の志有らば、須らく聖道を棄てて浄土に帰すべし。

又云く、善導和尚、正・雑二行を立て、雑行を捨てて正行に帰するの文。

第一に読誦雑行とは、上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外、大小乘・頭密の諸經に於いて受持し読誦するを悉く読誦雑行と名く。

賢王や聖人が尊敬し重んじていることからみても、今の高僧たちが立派な僧侶であることがわかります。それなのに貴僧はなぜ人を迷わす妄りな言葉を吐いて、そのように謗られるのですか。いったい誰を指して悪僧だといわれるのですか。くわしく承りたいものです。

主人が答えている。後鳥羽上皇の時代に法然房源空という者がいて、選択集という書物を著わし、釈尊一代の尊い教えを破つて、多くの人びとを迷わせてしまったのです。

その選択集には次のように記されています。「道綽禪師の安樂集には、仏教を聖道門と浄土門の二門に分けて、聖道門を捨てて浄土門に入るべきであると説いています。その聖道門には大乘教と小乗教の二つがある。

(中略) これに準じて考えると当然、密教も実大乘教も聖道門の中に含まれるべきであります。そう考えれば、今の世に信仰されている真言・禅・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論の八宗は、みな聖道門の中に入り、捨てられるべきものです」

さらに曇鸞法師の往生論の註で云うには、「謹んで考えるに龍樹菩薩の十住毘婆沙論に説かれています菩薩が覚りを求めるのに二つの道がある。一は難行道、二は易行道。この難行道とは聖道門のことであり、易行道とは浄土門のことです。

浄土宗を学ぶ者は何よりも先に聖道と浄土、難行と易行の区別を知らなければなりません。たとえ以前から聖道門を学んでいる人でも、もし浄土往生を志すならば、きつぱりと聖道門を捨てて浄土門へ入らねばなりません」と。

また選択集第二章には次のようになっています。「善導和尚は觀無量壽經疏に、正行・雑行の二種の修行法を立て、雑行を捨てて正行に帰依しなければならぬと説いています。

第一の読誦雑行とは、往生浄土を説いた觀無量壽經・大無量壽經・阿彌陀經の三部經以外の大乘・小乘、頭教・密教の諸經を信じたり読んだりすることを読誦雑行と名づけるのです。

第三に礼拝雑行とは、上の弥陀を礼拝するを除きて已外、一切の諸仏・菩薩等及び諸の世天等に於いて、礼拝恭敬するを悉く礼拝雑行と名く。

私に云く、此の文を見るに、須らく雑を捨てて、専を修すべし。豈百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行に執せんや。行者能く之を思量せよ。

又云く、貞元の入蔵録の中に、始め大般若経六百卷より、法常住経に終るまで、頭密の大乗経、惣じて六百三十七部二千八百八十三卷なり。皆須らく誦誦大乘の一句に撰すべし。

当に知るべし。随他の前には暫く定散の門を開くと雖も、随自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉じざるは、唯是れ念仏の一門なり。

又云く、念仏の行者必ず三心を具足すべきの文。

観無量寿経に云く、同経の疏に云く、

問ふて曰く、若し解行の不同・邪雑の人等有りて、外邪・異見の難を防がん。

或いは行くこと一分・二分するに群賊等喚び廻すとは、即ち別解・別行の悪見の人等に喩ふ。

私に云く、又此の中に一切の別解・別行・異学・異見等と言ふは、是れ聖道門を指すなり。已上。

又最後結句の文に云く、

第三の礼拝雑行とは、阿弥陀如来以外の一切の諸仏・菩薩・諸天などを拝んだり敬つたりすることをすべて礼拝雑行と名づけます」

私（法然）は云います。「善導和尚がいわれたことは、すべての雑行を捨てて専ら念仏の正行を修行すべきと。百人が百人ともに往生できるという専修念仏の正行を捨てて、千人に一人も成仏できないという雑修雑行にどうして執着する必要があるでしょうか。仏道を修行しようとする者はよくこのことを考えなさい」と。

また法然は選択集の第十二章で云います。「貞元入蔵録という唐の貞元間に編集された經典の目録の始めの大般若経六百卷から、終わりの法常住経にいたるまでの頭密の大乗経総じて六百三十七部二千八百八十三卷の大乗經典は、ことごとく観無量寿経にいう誦誦大乘の一句に収められてしまします。

したがって人々は知らなければなりません。仏が他の衆生の機根に随つて教えを説かれる場合には暫く、定散二門のさまざまな修行を開説せられたけれども、仏が自らの本懐にしたがつて真実を述べられる場合には、前の定散の二門は方便として閉じられ廃止されてしまします。末法の衆生の前に一度開いて永遠に閉じられることのないのは、ただ念仏の一門だけです」と。

また選択集の第八章には次のように云っています。

「念仏の行者は必ず至誠心・深心・回向発願心の三種の心を具えなければならぬ。

ということが観無量寿経に説かれています。この文を善導が注釈した中に、

『問うて言います。若し仏法の理解と修行の不同を主張し、念仏によつて往生はできないという邪見雑行の人の非難を防ぐため一つの譬えを示しましょう。

南と北に火と水の恐ろしい河があり、その中間を東から西へ細い道が一本走っています。西方を志す旅人がその道を行くと、東岸の群賊たちが危険だから引き返せと叫んでいます。この群賊たちは念仏の行者を妨げることを譬えたものです』とあります。

私（法然）が云います。「この注釈の中で念仏の行者と学解を異にし、修行を異にし、学問や思想識見を異にする者というのは、聖道門を指すのであります」と。〈以上、引用〉

また選択集の最後の結びの文には次のように記されています。

夫れ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には且く聖道門を聞いて、選んで浄土門に入れ。

浄土門に入らんと欲せば、正・雜二行の中には且く諸の雜行を抛つて、選んで心に正行に帰すべし。已上。

之に就いて之を見るに、曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・浄土・難行・易行の旨を建て、

法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷、一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、皆聖道・難行・雜行等に撰して、

或いは捨て、或いは閉じ、或いは闔き、或いは抛つ、この四字を以て多く一切を迷はし、剩へ三國の聖僧・十方の仏弟を以て皆群賊と号し、併せて罵詈せしむ。

近くは所依の浄土三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の若人不信毀謗此經、乃至其人命終入阿鼻獄の誠文に迷ふ者なり。

於是に代末代に及び、人、聖人に非ず。各冥衢に容つて並びに直道を忘る。悲しいかな瞳瞭を樹てず。痛ましいかな徒らに邪信を催す。

故に上國王より下土民に至るまで、皆經は浄土三部の外の經無く、仏は弥陀三尊の外に仏無しと謂へり。

仍つて伝教・義真・慈覺・智証等、或いは万里の波濤を渉つて渡せし所の聖教、或いは一朝の山川を廻つて崇むる所の仏像、若しは高山の巔に華界を建てて以て安置し、若しは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す。

「そもそも速く生死の苦しみから離れようと思うならば、聖道・浄土二門のすぐれた教えのうち、聖道門は覚りたいからしばらくこれを聞いて、浄土門を選びなさい。

浄土門に入ろうと思うならば、正行・雜行二種の修行法のうち、すべての雜行を抛つて念仏の正行を選んで帰依しなさい」と。(以上、引用)

以上に引用した選択集の諸文を見ますと、法然は曇鸞・道綽・善導の誤つた解釈を引いて、聖道門と浄土門という教えの区別、難行道と易行道という修行の区別を立てて、

法華經および真言をはじめ釈尊一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷とあらゆる諸仏・諸菩薩および神々を、すべて聖道門・難行道・難行の中におさめ、

「或いは捨てよ・閉じよ・闔けよ・抛てよ」とこの四字を教えて多くの人びとを迷わしています。そればかりでなく、インド・中国・日本の聖僧や仏弟子をすべて群賊だとののしつていっているのです。

このような言葉は、近くは源空が依りどころとしている浄土三部經の「五逆罪を犯した者と正法を謗つた者とは往生できない」という阿弥陀如来の誓いの文に背き、また遠くは一代仏教の中心である法華經第二卷の譬喩品の「この經を信ぜずにしてる人は、死して無間地獄に落ちる」という釈尊の誠めの文に背くものであります。

さて、今の世は末世であり、人びとも愚かで聖人ではありません。みな迷いの道に入りこんで覚りへの道を忘れてしまっています。悲しいことには誰もその誤りを指摘し迷いをさまそうとはいいたしません。痛ましいことには間違つた信仰がますます広まっています。

したがって、上は國王から下は一般民衆にいたるまで、みな經は浄土三部經以外にはなく、仏は阿弥陀三尊しかないと思つています。

その昔、伝教・義真《弘法》・慈覺・智証などの先師たちは万里の波濤を渡つて唐に入りもたらした經典や、各地の山川を回つて崇めた仏像を、比叡山の頂に堂塔を建てて安置し、あるいは深い谷に寺塔を建てて崇めました。

釈迦・薬師の光を並ぶるや、威を現当に施し、虚空・地藏の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に国主は郡郷を寄せて、以て灯燭を明かにし、地頭は田園を充てて以て供養に備ふ。

而るを法然の選択に依つて、則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び、付属を抛つて東方の如来を閑き、唯四卷三部の經典を専らにして、空しく一代五時の妙典を抛つ。

是を以て、弥陀の堂に非ざれば、皆供仏の志を止め、念仏の者に非ざれば早く施僧の懐を忘る。故に仏堂零落して瓦松の煙

然りと雖も各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以て住持の聖僧行いて帰らず。守護の善神去りて来ることなし。是れ偏に法然の選択に依るなり。

悲しいかな数十年の間、百万の人、魔縁に蕩かされて多く仏教に迷へり。

傍を好んで正を忘る、善神怒りを成さざらんや。円を捨てて偏を好む。

悪鬼便りを得ざらんや。如かず、彼の万祈を修せんより、此の凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文、浄土の三部経を説きたまひてより以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に帰し、

道綽禪師は涅槃の広業を閑きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛つて専修を立て、恵心僧都は諸経の要文を集めて念仏の一行を宗とす。弥陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人其れ幾ばくぞや。

就中法然聖人は、幼少にして天台山に昇り、

また比叡山の西塔と東塔には釈迦如来と薬師如来とが安置されて、現在だけでなく未来までも威光を及ぼし、横川には虚空蔵菩薩と地藏菩薩が祀られて、教化利益の力は後生にまで施されました。だからこそ国主は郡村郷土を寄進しご宝前の灯明蠟燭を明るくし、地頭は土地や田畑を寄進して供養を捧げたのであります。

ところが法然の選択集が世に出てからは、人びとはこの娑婆世界の教主釈尊を忘れ、西方極楽世界の阿弥陀如来を貴び、伝教大師から続いてきた薬師如来は捨てられ、ただ浄土四卷三部経だけを依りどころとして、空しく釈尊一代の經典はすべて捨てられてしまいました。

そして阿弥陀堂でなければ供養も捧げず、念仏の行者でなければ布施もしないようになってしまったのです。そのため仏堂は荒れはて、僧房は訪れる人もなく、荒廢し、庭はただ雑草ばかり茂っています。

それでも惜しいと思ひ護る者はなく、再建しようとする者もありません。このようなありさまですので、住持の僧は見捨てて帰らず、守護の善神も去って帰ることもありません。これは偏に、法然の選択集に依るのです。

悲しいかな法然の選択集より数十年の間、多くの人がこの魔説に迷わされ、仏教の正道を失ってしまいました。

傍系を好んで正統を忘れるならば守護の善神も必ず怒るに相違ありません。円教の法華経を捨てて、かたよった教えを好んでいる。

だから悪鬼が跳梁跋扈するのである。あらゆる祈禱を修するよりも、念仏の凶事を禁止することには及ばない。

客はいちだんと怒り、顔色を変えていう。われらの本師釈尊が浄土三部経を説かれてから、中国の曇鸞法師は四論『中論』『十二門論』『大智度論』『百論』の講説をやめて浄土の教えのみに帰依し、

道綽禪師は涅槃経を捨ててただひたすら西方往生の行を弘め、善導和尚は雑多な修行を抛つて専ら念仏を修し、また日本の恵心僧都は諸経の要文を集めて念仏の一行だけを立て宗としました。阿弥陀を尊重すること誠にこの様な有様です。また念仏によつて往生をとげた人も数多くおります。

その中でも、法然上人は幼少の時から比叡山に登り、

十七にして六十巻に涉り、並びに八宗を究め、具に大意を得たり。

其の外一切の経論を七遍反覆し、章疏伝記究め看ざること莫し。智は日月に斉しく、徳は先師に越えたり。然りと雖も猶出離の趣に迷い、涅槃の旨を弁へず。

故に徧く觀、悉に鑒み、深く思ひ、遠く慮つて、遂に諸経を抛つて専ら念仏を修す。其の上一夢の靈応を蒙つて四裔の親疎に弘む。

故に或いは勢至の化身と号し、或いは善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女は歩みを運ぶ。しかしより来、春秋推し移り、星霜相積れり。

而るに忝なくも釈尊の教を疎かにして、恣に弥陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、強ひて先師を毀り、更に聖人を罵るや。毛を吹きて疵を求め、皮を剪つて血を出す。

昔より今に至るまで此の如き悪言未だ見ず。惶るべし。慎むべし。罪業至つて重し、科條争でか遁れん。対座猶以て恐れ有り。杖を携へて則ち帰らんと欲す。

主人咲み、止めて曰く、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷廁に忘る。善言を聞いて悪言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑つて悪侶に擬す。

其の迷ひ誠に深く、其の罪浅からず。事の起りを聞け、委しく其の趣を談ぜん。

釈尊説法の内、一代五時の間、先後を立てて権実を弁す。

而るに曇鸞・道綽・善導既に権に就いて実を

十七歳で天台の三大部六十巻を学び、並びに八宗の教義を具に究めました。

そのほか一切経を七回もくり返して読まれ、注釈書や伝記類までも究めないものはありません。智慧の明らかなことは日月に等しく、徳の高いことは先師たちを越えています。それでもなお生死に迷い悟りの玄旨が理解出来なかった。

そこで広く先師の書を觀て、時代や機根をよく考えて、深く浄土門の修行しやすいことを思い、遠く聖道門の悟りがたいことを考えをめぐらして、その結果、ついに諸経を抛つて専ら念仏を修行されたのです。そのうえ、善導和尚の夢のお告げを得て、広く人々に念仏を広めたのです。

そこで人びとは勢至菩薩の化身であるとも、また善導大師の再誕であると仰ぎました。だから貴賤を問わずその教えを聞こうと頭を低くして国中の男女はそのもとを訪れたのです。それ以来、季節は移り、数十年の年月が過ぎました。

それにもかかわらず、貴僧はもつたいたいなくも釈尊の説かれた浄土三部経を軽んじ、阿弥陀仏の誓願をそしられることは、まことにおそれ多いことです。どうして近年の災難を法然上人の念仏流行の時代の罪だといって、無理に曇鸞・道綽・善導などの先師をそしり、さらに法然聖人をのしるのですか。たとえていえば、毛を吹いて疵を探し、皮をこすつて血を出すようなもので、よけいなせんさくです。

今までこのような悪口雑言は聞いたことがありません。まことに恐ろしいことですし、慎しむべきことです。その罪はきわめて重く、科はとうてい逃れられません。こうして対座していることさえ恐ろしいことですから、私はこれで杖を持って帰ろうと思えます。

主人はにっこりと笑つて客を止めていう。

蓼食う虫が蓼の辛きに馴れ、便所の虫が糞尿の臭さを忘れるように、念仏往生の法門に染まってしまうと事の是非善悪がわからなくなつて、善い言葉を聞いても悪言と思ひ、正法を謗る人を見ても聖人といい、正しい師を見ても悪僧と疑つたりするものです。

その迷いはまことに深く、その罪は浅くありません。まず事の起りをよく聞きなさい。くわしく法然の謗法の理由を話しましょう。

釈尊一代五十年の説法には、前後の順序があり、方便の教えと真実の教えとの区別があります。

しかし、曇鸞・道綽・善導らは、先に説いた方便権教を取

忘れ、先に依りて後を捨つ。未だ仏教の淵底を探らざる者なり。

就中法然其の流を酌むと雖も、其の源を知らず。

所以は何ん。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、並に一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、捨閑閑抛の字を置いて、一切衆生の心を薄す。

是れ偏に私曲の詞を展べて、全く仏經の説を見ず。妄語の至り、悪口の科、言ひても比ひ無く、責めても余りあり。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の選択を貴む。

故に浄土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一仏を仰いで諸仏を忘る。誠に是れ諸仏・諸經の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。此の邪教広く八荒に弘まり、周く十方に遍す。

抑も近年の災を以て往代を難ずるの由、強ちに之を恐る。聊か先例を引いて汝の迷ひを悟すべし。

止觀の第二に史記を引いて云く、周の末に被髮袒身にして礼度に依らざる者あり、と。

弘決の第二に此の文を釈するに、左伝を引いて曰く、初め平王の東遷するや、伊川に被髮の者の野に於いて祭るを見る。識者の曰く、百年に及び、其の礼先ず亡びぬ、と。

爰に知んぬ。徵前に頭はれ、災後に致ることを。

又、阮籍逸才にして蓬頭散帶す。

つて、後に本意を述べられた法華実教を忘れて捨ててしまったのです。彼らはまだ仏教の根底を究めていない未熟な者といわざるをえません。

ことに法然は浄土三師の流れをくむ者ですが、彼らと同じく仏教の根源が法華実教にあることを知らないのです。

なぜならば、すべての大乘經典六百三十七部二千八百八十三卷と一切の仏・菩薩及び神々を捨てよ、閉じよ、閑けよ、抛てよの四字を説いて、多くの人びとの心を迷わせているからです。

これは法然一人が自分勝手に曲げて解釈した言葉であり、まったく仏説にもとづいていません。その妄語の至り悪口の罪は他に比べるものもなく、責めても責めつくせません。人びとは皆法然の間違った説を信じ、選択集を尊んでいる。

だから浄土三部經だけを崇めて他の諸經を抛ち、極樂世界の阿弥陀仏だけを拜んで他の諸仏を忘れてしまいました。まことに法然こそは諸仏諸經の怨敵であり、聖僧や大衆の敵であります。今やこの邪教が広く天下に弘まってしまったのです。

いったいあなたは、私が近年の災いを昔の罪だ、法然の謗法が原因だと非難したことを強く恐れているようです。少しばかり先例を引いてその根拠があることを証明して、あなたの迷いを悟らしてあげましょう。

天台大師の摩訶止觀第二に史記を引用して次のように記しています。「周の代の末に、髪を乱し、衣を着ないで、礼儀をかまわない者たちがいた」と。

この文を妙樂大師は摩訶止觀弘決に春秋左氏伝を引用して次のように解釈しています。「周の平王が外敵に侵略されて都を東へ遷すとき、伊川のほとりで髪を乱した者が野に立って祭をしているのを見て、太夫の辛有が嘆いていうには、百年の後にはこの地も周の領土ではなくなるかもしれない。それは礼儀がすでにすたれてしまっているからだ」と。

これらの文からわかるように、災いの前には必ずその前兆が現われるものです。

また摩訶止觀には、前の文に続いてこのように記しています。

「阮籍はすぐれた才能のある人であったが、つねに髪をのばし、帯も締めずに生活していた。」

後に公卿の子孫皆之に教ひ、奴苟相辱しむる者を方に自然に達すといひ、樽節、兢持する者と呼んで田舎と為す。司馬氏の滅ぶる相と為す。已上。

又案ずるに、慈覚大師の入唐巡礼記に云く、唐の武宗皇帝の会昌元年、勅して章敬寺の鏡霜法師をして、諸寺に於いて弥陀念仏の教を伝へしむ。寺毎に三日巡輪すること絶えず。同二年、回鶻国の軍兵等唐の境を侵す。同三年、河北の節度使忽ち乱を起す。

其の後大蕃国更命を拒み、回鶻国重ねて地を奪ふ。凡そ兵乱は秦項の代に同じく、災火は百里の際に起る。何に況んや武宗大いに仏法を破し、多く寺塔を滅ぼせるをや。乱を撲むること能はずして、遂に以て事有り。已上取意。

此を以て之を惟ふに、法然の後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。然れば則ち大唐に例を残し、吾が朝に証を顕はす。汝疑ふこと莫れ。汝怪しむこと莫れ。唯須らく凶を捨て、善に歸し、源を塞ぎ、根を截るべし。

客聊か和らいで曰く、未だ淵底を究めざれども、数其の趣を知る。但し華洛より柳營に至るまで、釈門に枢樞在り、仏家に棟梁在り。然れども未だ勘状を進らせず。上秦に及ばず。汝賤しき身を以て輒く莠言を吐く。其の義余り有れども、其の理謂はれ無し。

主人の曰く、予少量為りと雖も、忝なくも大乘を学べり。蒼蠅驥尾に附して万里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋を延ぶ。

弟子一仏の子と生れて諸経の王に事ふ。何ぞ仏法の衰微を見て心情の衰惜を起さざらんや。

後に公卿の子弟たちもこれにならつて、下品な言葉でのしりあったり、礼を無視することが自然であるといい、かえって礼儀を守り慎み深い者を田舎者と軽蔑した。これが司馬氏の滅びる前兆である」と。以上。

また慈覚大師の入唐求法巡礼行記には次のようなことが記されています。

「唐の武宗皇帝は会昌元年（八四一）、章敬寺の鏡霜法師に各寺々で弥陀念仏の教を伝えるよう勅命を下した。寺毎に三日ずつ巡教が続けられた。同二年にはウイグル国の兵が唐の国境を侵略し、同三年には河北の節度使がすぐに反乱を起こした。

その後、チベットも唐の命令を拒否し、ウイグルも重ねて唐の領地を奪った。このような戦乱の続いたことは、秦から漢への時代と同じで、戦乱による火災が村や里まで起きた。まして武宗は大いに仏教を破り、多くの寺塔を破却した。だから反乱を収めることもできず、ついに自分の命にも及んだのである」と。(以上、取意引用)

このように中国の歴史を見て、日本の現実を考えてみると、法然は後鳥羽上皇の建仁年間（一一〇一―一一〇四）の人であり、後鳥羽上皇が隠岐の島に配流されたことは眼前の事実であります。念仏が災難の原因をなすということは、唐にその実例があり、我が日本でも証明されています。疑つてはいけません。怪しんではいけません。近年のうち続く災難を除くためには、何よりもまず念仏の凶を捨てて、法華経の善に帰依し、災難の原因を塞ぎ、謗法の根源を断ち切らなければなりません。

客は少し態度をやわらげて次のようにいう。

いまだ原因の奥深いところまでは解りませんが、およその趣旨はわかりました。しかし、京都から鎌倉へ至るまで、仏教界には立派な人物が数多くいます。しかしまだ幕府に意見書を提出したり朝廷に進言した人はおりません。貴僧が身分をわきまえず軽々しくもつともらしい事を言うその意義はわかりますが、道理に叶いません。

主人は答えていう。

私は器量は小さい者ではありませんが、ありがたいことには大乘の教を学んでおります。たいして飛べない青縄も駿馬の尾にとまっていれば万里まで行き、それほど伸びない緑の蔦も松の大木にからむことでおのずから千尋の高さにまで延びることができます。

仏弟子の一人として生まれ、諸経の王である法華経に仕えております。それゆえに、どうして、正しい仏法が衰えているのを見て悲しまないではいられましようか。

其上涅槃經に云く、
若し善比丘あつて、法を懐る者を見て、置いて呵責し、駈遣し、拳処せずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。

若し能く駈遣し、呵責し、拳処せば、是れ我が弟子、真の声聞なり。余、善比丘の身為らずと雖も、仏法の中怨の責めを通れんが為に、唯大綱を撮つて粗一端を示す。

其の上、去ぬる元仁年中、延暦・興福の両寺より、度々秦聞を経て、勅宣・御教書を申し下し、法然の選択の印板を大講堂に取り上げ、三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしめ、法然の墓所に於いては、感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ。

其の門弟隆観・聖光・成覚・薩生等は遠国に配流せられ、其の後未だ御勘気を許されず。豈未だ勘状を進らせずと云んや。

客則ち和らいで曰く、

經を下し僧を謗すること、一人として論じ難し。然れども大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、並に一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の四字に載す。「其の」詞勿論なり。其の文頭然なり。此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成す。迷つて言うか。覺つて語るか。賢愚弁へず。是非定め難し。

但し災難の起りは選択に因るの由、盛んに其の詞を増し、弥、其の旨を談ず。所詮、天下泰平国土安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所なり。

夫れ国は法に依つて昌え、法は人に因つて貴し。国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき。法を誰か信ずべけんや。

先ず国家を祈つて須らく仏法を立つべし。若し災を消し、難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

また大般涅槃經の寿命品に説かれています。

「たとえ立派な僧であつても、正法を破る者を見て、これをとがめせず、追い出そうともせず、その罪をただそうともしないならば、この人は仏法の中の怨敵である。

これに対し、謗法の者を追い出し、きびしく責め、罪をただす、これこそ真の仏弟子である」と。私は決して立派な僧といわれる身ではありませんが、「仏法の中の怨である」という仏のお叱りを受けたくないために、ただその大要をとつて一端を述べるにすぎないのであります。

その上、去る元仁年間（一二二四—一二二五）には延暦寺と興福寺から、たびたび念仏停止の奏状が上呈されたので、嘉祿三年（一二二七）には朝廷から勅宣、幕府から御教書が下され、選択集の板木を比叡山の大講堂に取りあげ、三世の諸仏の御恩を報じるためにといつて、これを焼失させ、法然の墓所は祇園神社の犬神人という使用人に命じて破却させたのです。

また法然の弟子である隆観・聖光・成覚・薩生らは遠国に流されて、その後まだ許されていません。このような前例をもつてしても、なお上奏した者がいないといえるでしょうか。

客はさらに態度をやわらげて次のようにいう。

私には法然が經典を軽んじたり、僧を謗つたりしているかどうかは、はつきりと断定はできません。しかし、たくさんの大乘經典とすべての仏や菩薩や神々を、捨・閉・閣・抛の四字をもって捨てたことは、その文にはつきりとしています。しかし、そのわずか四字くらいの瑕をとりあげて、法然を謗法の者だとそしめるのはいかがかと思われます。貴僧が迷つていわれているのか覺つていわれているのか、よくわかりません。貴僧のお考えが正しくすぐれているのか、法然が愚かで誤っているのか、いずれとも決められません。

ただし、災難の起こる原因が選択集にあるということは、先ほどからの文証をあげてのお話でよくわかりました。要するに、世の中が平和であり、国土が安穩であることは、国王から民衆にいたるすべての人びとの願いであります。

思うに、国は仏法によつて繁栄し、仏法は人によつて貴ばれるものです。もし国が滅び、人がなくなつてしまつたならば、いったい誰が仏法を崇め信じるでしょうか。誰も信じる者はいないでしょう。でありますから、

まず国家の安穩を祈つて、そして仏法を立てるべきであると思われます。そこで、もし災難を除く方法があるならば、どうかお聞かせ願いたいものです。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして、敢へて賢を存せず。唯経文に就いて聊か所存を述べん。抑も治術の旨、内外の間、其の文幾多ぞや。具に挙ぐべきこと難し。但し仏道に入つて数愚案を廻らすに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば、國中安穩にして天下泰平ならん。

則ち涅槃經に云く、
 仏の言はく、唯一人を除いて余の一切に施さば、皆讚歎すべし。

純陀問ふて言く、云何なるをか名づけて唯一人を除くと為すや。

仏の言はく、此の經の中に説く所の如きは破戒なり。

純陀復言く、我今未だ解せず。唯願はくは之を説きたまへ。

仏純陀に語つて言はく、破戒とは謂く、一闍提なり。其の余の在所一切に布施するは、皆讚歎すべし。大果報を獲ん。

純陀復問ひたてまつる。一闍提とは其の義云何。

仏の言はく、純陀、若し比丘及び比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて、兇惡の言を發して正法を誹謗せん。是の重業を造つて永く改悔せず、心に懺悔無からん。是の如き等の人を名づけて一闍提の道に趣向すと為す。
 若し四重を犯し、五逆罪を作り、自ら定めて是の如き重事を犯すと知れども、而も心に初めより怖畏・懺悔無く、肯えて発露せず。

彼の正法に於いて永く護惜建立の心無く、毀皆輕賤して言に過咎多からん。是の如き等をも亦一闍提の道に趣向すと名づく。唯此の如き一闍提の輩を除いて、其の余に施せば、一切讚歎すべし。

主人は答えていふ。

私は頑なな愚かな者であり、賢くはありませんが、仏の弟子でありますから、仏の教えにもとづいて経文を本として少しばかり考えていることを述べてみたいと思います。およそ災難をはらい除く方法は、仏教にも仏教以外にもいろいろあつて、具体的にあげることがむずかしいのです。

しかし、仏道に入つて度々愚かでありますが思案を廻らすと、正法を謗る人を禁じて、正法を信ずる人を重んずるならば、國中は安穩で天下は泰平になります。

その理由は、まず

涅槃經大衆所問品に次のように説かれています。

「仏が純陀の問いに答えて言われるには、施してはならない者、この一人を除くすべての者に施しをすることは皆褒め讃えるべきです。

純陀が施してはならない一人とはどういう人のことであるかと問うと、

仏はそれはこの經の中に説く破戒の者である、と答えられた。

純陀はさらに、私にはよく理解出来ません。願わくばもう少しくわしくお説きいただきたいと言いました。

そこで仏は、破戒とは一闍提のことである。一闍提を除くすべての者に施すことは善いことであつて、皆褒め讃えるべきです。まさに大果報を得るであろう、と答えられた。

純陀は再び一闍提とはどういうことですかと質問した、

仏は答えられた。純陀よ、若し僧侶や男女の信者で口ぎたなく正法をそしる大罪を犯しながら、永く悔い改めず懺悔しない。この様な者を名づけて一闍提への道に墮落するといふのである。

もし殺生、盗み、不義の交わり、妄語の四つの重罪を犯し、父母を殺し、僧を殺し、仏を傷つけ、僧団を破壊する五つの逆罪を犯して、自らこのような重罪を犯したと知りながら、初めから怖れ、懺悔の心もなく、あえて罪を告白しようともしない。

正法を護り弘める心もなく、かえつてそしつたり、輕蔑したり言うことが多く間違つている。この様な者を一闍提への道に墮落するといふのである。この一闍提だけを除いて、その他のすべての者に施すことは善いことであり、すべてほめたえられるであろう」と。

又云く、

我往昔を念ふに、閻浮提に於いて大国の王と作れり。名を仙予と曰ひき。大乘經典を愛念し、敬重し、其の心純善にして僞悪嫉恚有ること無し。善男子、我尔の時に於いて心に大乘を重んず。

婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已つて即時に其の命根を断つ。善男子、是の因縁を以て是より已来地獄に堕ちず。

又云く、
如来昔国王と為りて、菩薩道を行ぜし時、尔所の婆羅門の命を断絶しき。

又云く、
殺に三有り。謂く下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を除く。

下殺の因縁を以て地獄・畜生・餓鬼に堕し、具に下の苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生に微の善根有り。是の故に殺さば具に罪報を受く。

中殺とは凡夫人より阿那含に至るまで是を名づけて中と為す。是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に堕ち、具に中の苦を受く。

上殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に堕つ。

善男子、若し能く一闍提を殺すことあらん者は、則ち此の三種の殺の中に堕ちず。善男子、彼の諸の婆羅門等は、一切皆是れ一闍提なり。已上。

仁王經に云く、
仏、波斯匿王に告げたまはく、是の故に諸の国王に付属して、比丘・比丘尼に付属せず。何を以ての故に。王の威力無ければなり。已上。

涅槃經に云く、
今無上の正法を以て諸王・大臣・宰相及び四部の衆に付属す。正法を毀る者をば大臣・四部の衆、当に苦治すべし。

また**涅槃經聖行品**には、次のように説かれています。

「私は昔、この世界で大国の王となり、仙予という名であった。その時に大乘經典を大切にし、敬い、心は素直で、口ぎたない、悪い、ねたみ、惜しむといった気持ちはなかった。善男子よ、この様に大乘經典を重んじていた。

しかし、婆羅門が大乘の教えをそしるのを聞いて、ただちにその者の命を断つてしまった。しかし善男子よ、正しい教えを護つたこの功德によって、それから後は地獄に堕ちることにはなかつた」と。

また同じく**涅槃經梵行品**には次のように説かれています。
「仏が昔、国王となつて菩薩の修行をしていたとき、多くの婆羅門の命を断つたことがある」と。

同じく**涅槃經梵行品**に次のように説かれています。
「殺生に上中下の三種類がある。下の殺生というのは蟻のようなものをはじめ、あらゆる畜生を殺すことである。ただし、菩薩が畜生を救うために畜生に身を変じている場合は除かれる。

下の殺生の因縁によって、地獄・餓鬼・畜生に堕ち具に下の苦しみを受ける。どうしてかという、どんな生物でも微かながらも善根をもっているからであり、だから殺せば具に苦しみを受ける。

中の殺生というのは、凡夫から再び欲界に還つてこないという悟りの境地に達した聖者にいたるまでの人を殺すことである。その結果、地獄・餓鬼・畜生に堕ちて下の殺生よりも重い苦しみを受ける。

上の殺生というのは、父母や声聞や縁覚や菩薩を殺すことで、この報いはもつとも重く無間地獄に堕ちるのである。

善男子よ、もし一闍提を殺す者があつたとしても彼らはこのような三悪趣へは堕ちない。善男子よ、彼の婆羅門たちは異端の教えを説く、正法をそしる一闍提であるから」と(以上、**經文**)。

また**仁王經受持品**には次のように説かれています。
「仏が波斯匿王にいわれるには、仏法を護り伝え弘めることをすべての国王に委嘱して、僧および尼たちには委嘱しないのである。なぜならば、僧たちには国王のような威力がないからである」と(以上、**經文**)。

また**涅槃經壽命品**には次のように説かれています。
「今、最高の正法をすべての国王や大臣や役人やその他、僧俗の仏弟子たちに委嘱する。正法をそしる者があれば、みな力を合わせて徹底的に根絶対治しなければならない」と。

又云く、
 仏の言はく、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修せずして、応に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし。

又云く、
 若し五戒を受持せん者有るも、名づけて大乘の人と為すことを得ざるなり。五戒を受けざれども、正法を護るを為て乃ち大乘と名づく。正法を護る者は当に刀劍・器仗を執持すべし。刀杖を持すと雖も、我是等を説いて、名づけて持戒といはん。

又云く、
 善男子、過去の世に此の拘尸那城に於いて、仏の世に出でたまふこと有りき。歡喜増益如来と号したてまつる。仏涅槃の後、正法世に住すること無量億歳なり。

余の四十年仏法の末、尔の時に一の持戒の比丘有り。名を覺徳と曰ふ。尔の時に多く破戒の比丘あり。是の説を作すを聞き、皆悪心を生じ、刀杖を執持して、是の法師を逼む。

是の時の国王、名を有徳と曰う。是の事を聞き已つて、護法の為の故に、即便説法者の所に往至して、是の破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す。尔の時に説法者厄害を免るることを得たり。

王、尔の時に於いて、身に刀劍・箭槊の瘡を被り、体に完き処は芥子の如き許りも無し。尔の時に覺徳尋いで王を讚めて言く、善哉善哉、王今真に是れ正法を護る者なり。当來の世に此の身当に無量の法器と為るべし。

王、是の時に於いて、法を聞くことを得已つて、心大いに歡喜し、尋いで即ち命終して阿闍仏の国に生じ、而も彼の仏の為に第一の弟子と作る。其の王の將從・人民・眷属の戦闘すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿闍仏の国に生ず。

さらに同じく涅槃經金剛身品には次のように説かれています。
 「迦葉よ、私は過去の世において能く正法を護つたから、この金剛の仏身を成就できたのである。善男子よ、正法を護る者は五戒を受けず威儀を修めなくても、まさに刀や弓や鉾槊を持つべきである」と。

また次のように説かれています。
 「若し五戒を持つている者でも大乘の人とはいえない。たとえ五戒を守らなくても正法を護る者は大乘の人だといえる。正法は護る者は刀劍や杖を持たねばならない。刀や杖を持つといつても私はそれは戒を持つと名づける。」と。

また同じ金剛身品には次のように説かれています。

「善男子よ、過去の世に、この拘尸那城に仏が出現した事があつた。歡喜増益如来という名であつた。この仏が入滅されたから無量億年も正法が続いた。

その後四十年正法が滅びようとする時に、ひとりの戒律を持つ僧が現われた。名を覺徳という。その時に多くの破戒の僧たちもいた。破戒の僧たちは覺徳の説くのを聞いて、悪だくみを企て、刀や杖をもって覺徳を殺害しようとした。

この時の国王は名を有徳といったが、この事を聞いて、正法を護るために覺徳の所にかけて、破戒の悪僧たちと戦つた。おかげで覺徳は被害を免れた。

王はその時全身に刀劍・鉾槊の傷を受けた。満身創痍であつた。覺徳はこれを見て、王を讚えて言われた。善き哉、善き哉あなたは今に正法を護る人である。未來の世には必ず無量の力を具えた説法者となるであろうといった。

王はこの時、法を聞き終わって非常に喜び、やがて命終つて阿闍仏の国に生まれ、しかもその仏の第一の弟子となつた。また王の家来で、王とともに戦つた者、これを見て喜んだ者は、すべて真の道を求める心を退くことなく、命終つて後、ことごとく阿闍仏の国に生まれた。

覺徳比丘却つて後、壽終つて亦阿闍仏の国に往生
することを得、彼の仏の為に声聞衆の中の第二
の弟子と作る。若し正法の尽きんと欲すること有
らん時、应当に是の如く受持し擁護すべし。

迦葉、尔の時の王とは則ち我が身是なり。説法の
比丘は迦葉仏是なり。迦葉、正法を護る者は、是
の如き等の無量の果報を得ん。是の因縁を以て、
我今日に於いて種々の相を得て、以て自ら莊嚴
し、法身不可壞の身を成ず。

仏迦葉菩薩に告げたまはく、是の故に法を護る
優婆塞等は、応に刀杖を執持して擁護することは
の如くすべし。

善男子、我涅槃の後、濁悪の世に、国土荒乱し、互
に相抄掠し、人民飢餓せん。尔の時に多く飢餓の為
の故に発心出家するもの有らん。是の如き人を名
づけて禿人と為す。

是の禿人の輩、正法を護持するを見て、駈逐し
て出さしめ、若しは殺し、若しは害せん。是の故
に我今、持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依
つて以て伴侶と為すことを聴す。

刀杖を持つと雖も、我是等を説いて名づけて持戒
と曰ん。刀杖を持つと雖も、応に命を断つべか
らず。

法華經に云く、
若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、即ち一切
世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄
に入らん。已上。

夫れ經文顯然なり。私の詞何ぞ加へん。凡そ
法華經の如くんば、大乘經典を謗る者は無量
の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に墮ちて、永く出
づる期無けん。

涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも、
謗法の施を許さず。

覺徳も命終わつて後、また同じく阿闍仏の国に生まれ、
この仏の声聞の第二の弟子となつた。いかなる世でも、正
法が滅びようとする時は、このようにして正法を受持し、
守護しななければならない。

迦葉よ、その時の有徳王とは私のことである。法を説いた
覺徳比丘とは迦葉仏である。迦葉よ、正法を護る者にはこ
のような無量の果報が得られる。この過去の因縁によって、
私は今、種々の相好をもつて身を飾り、決して破壊される
ことのない法身を成就することができたのである。

仏は迦葉菩薩におつしやつた、正法を護る在家信士たちは、
刀や杖などの武器をもつてこの様に護らねばならない。

善男子よ、私が入滅して後の濁悪の世には、国は乱れて荒
廢し、互いに侵略し奪い合い、人民は飢えに苦しむであ
らう。その時に食を得たいばかりに出家して僧となる者が多
いであろう。このような者を禿人、すなわち頭だけを丸く
して心は俗のままである者という。

この禿人たちは正法を護る者を見ては追放し、若しくは殺
したり、迫害したりするのであらう。だから私は戒律を持つ
出家僧が、武器をもつた在家の者を仲間とすることを許す
のである。

武器をもつていても私は戒を持つと言うのである。ただし、
刀や杖を持つていても、人の命を断つてはならない」と。

法華經譬喻品に次のように説かれています。

「この經を信じないで毀り破る人は、すべての世間の人び
との仏になる種を滅ぼすものである。またこの經を読み、
書し、持つ者を見て、軽んじ、憎み、ねたみ、恨みをいだ
く者の罪の報いは(中略)その人は命終わつて後に無間地
獄に墮ちるのであらう」と(以上、經文)。

以上のように經文は明らかであります。このうえ私の言葉
を付け加える必要はありません。およそ法華經に説かれる
とおりならば、大乘經典を謗る者は量りしれない五逆罪を
犯すよりも罪が重く、無間地獄に墮ちて永久に出る機会も
ないでしょう。

また涅槃經に説かれるとおりならば、五逆罪を犯した者に
供養することは許しても、正法を謗る者に布施することは
許されないのです。

蟻子を殺す者は必ず三悪道に落つ。謗法を禁ずる者は定めて不退の位に登る。所謂覚徳とは是れ迦葉仏なり。有徳とは則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の経教は一代五時の肝心なり。其の禁実(いましめ)に重し。誰か帰仰せざらんや。

而るに謗法の族正道の人を忘れ、剩へ法然の選択に依つて弥愚癡の盲瞽を増す。是を以て或いは彼の遺体を忍んで木画の像に露はし、或いは其の妄説を信じて莠言の模を彫り、之を海内に弘め、之を墮外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其の家風、施す所は則ち其の門弟なり。

然る間、或いは釈迦の手指を切りて弥陀の印相を結ばせ、或いは東方如来の雁宇を改めて西土教主の鵝王を居ゑ、或いは四百余回の如法経を止めて西方浄土の三部経と成し、或いは天台大師の講を停めて善導の講と為す。此の如きの群類其れ誠に尽し難し。

是れ破仏に非ずや。是れ破法に非ずや。是れ破僧に非ずや。此の邪義は則ち選択に依るなり。嗟呼悲しいかな、如来誠諦の禁言に背くこと。哀れなり、愚侶迷惑の僂語に随ふこと。早く天下の静謐を思はば、須らく国中の謗法を断つべし。

客の曰く、

若し謗法の輩を断じ、若し仏禁の違を絶たんに、彼の経文の如く斬罪に行ふべきか。若し然らば殺害相加へ、罪業何んが為んや。

則ち大集経に云く、

頭を剃り、袈裟を著せば、持戒及び毀戒をも、天人彼を供養すべし。則ち為れ我を供養するなり。

是れ我が子なり。若し彼を搥打すること有らば、則ち為れ我が子を打つなり。若し彼を罵辱せば、則ち為れ我を毀辱するなり、と。

蟻を殺した者でも必ず三悪道に墮ちる。けれども、謗法の者を殺せば必ず不退転の菩薩の位に達するのです。所謂覚徳比丘は、今は迦葉菩薩と生まれ、有徳王はすなわち釈迦牟尼仏なのです。

法華経・涅槃経に説かれる教えは、釈尊御一代五時にわたって説かれたもつとも大切な肝心であります。その禁は実に重大で、誰がこれ帰依し仰がない者がありませんか。

しかし謗法の人びとは正法を伝える人を忘れ、そのうえ、法然の選択集によつて愚かにもますます真実に目を閉じ耳を塞いでいるのです。そして、ある者は面影をしのんで木像や絵画に表わし、ある者は選択集の邪説を板木に彫り、印刷して天下に弘め翫んでいます。もつぱら浄土念仏の家風だけを信仰し、法然の流れをくむ者だけを供養しています。

さらに、ある者は釈尊像の手や指を切り取つて弥陀の印相に変え、ある者は薬師如来のお堂を改めて阿弥陀如来を安置したり、ある者は慈覚大師以来四百余年続てきた法華経書写の修行をやめて浄土三部経を書写したり、ある者は天台大師報恩の講会をやめて善導の講としてしまいました。このような類いの輩は数えきれないほどであります。

これこそまさしく仏を破壊し、法を破り、僧を破る大謗法ではないでしょうか。これらの邪義の根本は選択集にあるのです。ああ、仏の真実の禁に背くことは実に悲しむべきことであります。法然のような愚かな僧たちの、人の心を迷わせる邪説に従っていることは、実に哀れむべきことであります。一日も早く天下を安穩にしたいと思うならば、何よりもまず国じゅうの謗法を禁じるべきです。

客はいう。

もし正法を誹謗する者たちを断罪し、仏の戒めに背く者たちを根絶するには、涅槃経に説かれているとおりに打ち首にしなければならぬのでしょうか。もしそうならば、殺害が相重なり、その罪業はどうなるのでしょうか。

則ち大集経の法滅尽品に次のように説かれています。

「頭を剃つて袈裟をつけていれば、戒律を持つていようとまいと、諸天と人間とは彼に供養しなければならぬ。彼に供養することは私を供養することになる。なぜならば彼は私の子であるからだ。もし彼を毆打するならば、それは私の子を毆打することになる。もし彼を罵り辱しめることは、それは私を辱しめることになる」と。

料り知んぬ。善悪を論ぜず、是非を択ぶこと無く、僧侶為るに於いては供養を展ぶべし。何ぞ其の子を打辱して、忝なくも其の父を悲哀せしめん。

彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや、久しく阿鼻の焰に咽ぶ。先証斯れ明かなり。後昆最も恐れあり。謗法を誡むるに似て、既に禁言を破る。此の事信じ難し。如何が意を得んや。

主人の曰く、

客明かに経文を見て猶斯の言を成す。心の及ばざるか。理の通ぜざるか。全く仏子を禁むるに非ず。唯偏に謗法を悪むなり。

夫れ釈迦の以前の仏教は其の罪を斬ると雖も、能仁の以後の経説は則ち其の施を止む。然れば則ち四海万邦の一切の四衆、其の惡に施さずして、皆此の善に帰せば、何なる難か並び起り、何なる災か競ひ来らん。

客則ち席を避け襟を刷つて曰く、
仏教斯れ区にして旨趣窮め難く、不審多端にして理非明かならず。但し法然聖人の選択は現存なり。諸仏・諸経・諸菩薩・諸天等を以て捨閉闍抛に載せたる、其の文顕然なり。

茲に因つて聖人国を去り、善神所を捨て、天下飢渴し、世上疫病す。今主人広く経文を引いて明かに理非を示す。故に妄執既に翻り、耳目数朗かなり。

所詮、国土泰平天下安穩は一人より万民に至るまで好む所なり。樂ふ所なり。早く一闍提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、

この経文から推し量るに、善悪を論ぜず、是非を選ばず・僧侶であればすべて供養をしなければならぬのです。どうして仏弟子を打ち辱しめて、その父である仏を悲しませるのでしょうか。

昔、竹杖外道が目連尊者を殺したために無間地獄の底に沈んだことや、提婆達多が蓮華比丘尼を殺して永く無間地獄の焰に焼かれたことは、先例の証拠で明らかです。後世の私たちがもつとも恐れなければならぬことであります。涅槃經の説示は謗法を禁めるようではありませんが、実は大集經の仏の禁則を破るものではないでしょうか。ですから謗法者の命を奪うというようなことはとても信じがたいこととあります。いったいこれをどのように考えたらよろしいのでしょうか。

主人は答えていう。

あなたは謗法を禁ずる涅槃經の明らかな文を見ながら、まだそのような事を言っているのですか。私の意図があなたに十分に届かないのでしょうか。それとも明らかな道理が通じないのでしょうか。この経文の意味するものは、仏弟子を禁めるというのではなく、謗法の罪を責め、除こうというのであります。

そもそも謗法を禁断する方法として、昔の釈尊の過去の事蹟を語るときは、仙予王や有徳王として謗法者の命を断つたことを説きましたけれども、今の釈尊が教えるのは、謗法者に対して布施をしてはならないということとあります。そうでありますからただちに、日本国じゅうの人びとが謗法の惡に対する布施を止め、正法に帰依したならば、どのような難も統発し、どのような災いも競い起こることはありません。

客は席を下がり、襟を正して次のようにいう。

仏の教えは廣大無辺で細かく分かれていて、その真意はたやすくわかりません。疑問も多く、道理にならなっているかどうかとも明らかではありません。しかし、法然聖人の選択集は現に眼の前にあり、その中に一切の仏も経も菩薩も神々も、捨てよ、閉じよ、闍けよ、抛てよの悪言をもつて、すべて排斥していることははっきりとしています。

この誤った教えによつて、聖人は国を去り、善神も国を捨て、その結果、天下は飢饉に襲われ、疫病が蔓延しているのです。今、あなたが広く経文を引用して道理を示されました。おかげで『選択集』への妄執も翻り、法の邪正を聞き分け、人の善悪を見分ける事がほぼ明らかになりました。

要するに、国土が泰平であり、天下が安穩であることは、上は天皇から下は万民にいたるまで、すべての人びとの好むところであり願ひ求めるところであります。一日も早く一闍提謗法の輩に対する布施を止めて、永く多くの正しい僧尼に供養をして

仏海の白浪を収めて、法山の緑林を截らば、世は義農の世と成り、国は唐虞の国と為らん。然して後、風水の浅深を斟酌し、仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰く、

鳩化して鷹と為り、雀変じて蛤と為る。悦ばし
いかな、汝蘭室の友に交つて、麻畝の性と成る。
誠に其の難を顧みて、専ら此の言を信ぜば、
風和らぎ浪静かにして、不日に豊年ならんのみ。

但し人の心は時に随つて移り、物の性は境に依つて改まる。譬へば猶水中の月の波に動き、陣前の軍の剣に靡くがごとし。汝当座には信ぜずとも、後定めて永く忘れん。若し先づ国土を安んじ、現当を祈らんと欲せば、速かに情慮を回らし念いで対治を加へよ。

所以は何ん。
薬師経の七難の内、五難忽ちに起り二難猶残り。所以、他国侵逼の難、自界叛逆の難なり。

大集経の三災の内、二災早く頭はれ、一災未だ起らず。所以兵革の災なり。

金光明経の内、種々の災禍一々に起ると雖も、他方の怨賊国内を侵掠する、此の災未だ露はれず。

此の難未だ来らず。
仁王経の七難の内、六難今盛んにして、一難未だ現はれず。所以四方の賊来つて国を侵すの難なり。
加之

国土乱れん時は先づ鬼神乱る。鬼神乱るるが故に
万民乱る、と。

今此の文に就いて、具に事の情を案ずるに、百鬼早く乱れ、万民多く亡ぶ。先難是れ明かなり。後災何ぞ疑はん。若し残る所の難、悪法の科に依つて並び起り、競ひ来らば其の時何んが為んや。

仏教界の邪義を流布する賊を退治し、謗法の根源を断ち切れば世の中は中国の聖代の伏羲・神農の理想の社会となり、国は唐堯・虞舜の治世の如き太平な国になるでしょう。そうしてから仏法の浅深・邪正をよく考えて、仏門の指導者を崇めましょう。

主人は喜んでいう。

中国の故事に鳩が鷹となり、雀が蛤となるということがありますが、あなたがそのように心を翻されたことは、まことに喜ばしいことであります。蘭の室に入れば身体は芳しくなり、麻の田に入れば蓬もまっすぐになるように、あなたが私の言葉を信じて災難に対処するならば、世の中は風が和らぎ、波が静かになるように、必ず穏やかとなり、日ならずして豊年となるでしょう。

しかし、人の心は時とともに変わりやすいものであり、また物の性質は環境によつて変化するものです。ちょうど水に映つた月が波によつて動き、戦場で兵士がおびえるようなものです。あなたは今は私の主張を聞いて信じているようですが、後になると永く忘れてしまうこともあるでしょう。もし心から国土の安泰を願ひ、現世の安穩を祈り、未来の成仏を求めるならば、すみやかによく考えて、謗法の者を対治しなければなりません。

なぜならば、
薬師経の七難のうち五つの難はすでに起こつて、外国からの侵略と国内の戦乱という二つの難が残っています。

大集経の三つの災いのうち二つの災いはすでに頭われましたが、戦乱の一つがまだ残っています。

金光明経に説かれるさまざまな災禍はほとんど起こりましたが、外国からの侵略という災難だけはまだ現われていません。

仁王経の七難のうち六難は今さかんに起こっていますが、四方の賊が攻めてきてこの国を侵すという難だけは現われていません。

そのうえに前に引用した仁王経の文にも、
「国が乱れる時はまず鬼神が乱れ、鬼神が乱れるから万民が乱れる」とありました。

この経文に照らし合わせて細かく現在の日本の状況を考えてみますと、まさしく鬼神たち跳梁跋扈し、そのために多くの人びとが死にました。このよう災難は經典に明らかであり、残りの災難も必ず現われるに相違ありません。もし残りの災いである内外の戦乱の二難が、選択集の謗法の罪によつて続けて競い合うように起こつて来たらその時はどうしますか。

帝王は国家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊来つて其の国を侵逼し、自界叛逆して其の地を掠領せば、豈驚かざらんや。豈騒がざらんや。

国を失ひ、家を滅せば、何れの所にか世を通れん。汝須らく一身の安堵を思はば、先づ四表の静謐を脩るべきか。

就中人の世に在るや、各後生を恐る。是を以て或いは邪教を信じ、或いは謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを悪むと雖も、而も猶仏法に帰することを哀れむ。

何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を宗ばんや。若し執心翻らず亦曲意猶存せば、早く有為の郷を辞して、必ず無間の獄に墮ちなん。

所以は何ん。

大集経に云く、

若し国王有りて、無量世に於いて施・戒・恵を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種ゑる所の無量の善根悉く皆滅失せん。

乃至、其の王久しからずして当に重病に遇ひ、寿終つた後大地獄に生ずべし。王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡主・宰官も亦復是の如くならん。

仁王経に云く、

人、仏教を懷らば復孝子無く、六親不和にして天神も祐けず。疾疫・悪鬼日に來つて侵害し、災怪首尾し連禍縦横し、死しては地獄・餓鬼・畜生に入らん。若し出でて人と為らば、兵奴の果報ならん。

響の如く影の如く、人の夜書するに火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦復是の如し。

帝王は国家を基として天下を治め、帝王を補佐する臣下は田園を領有し世の中を保持しています。しかし他国から賊が侵入し国土を侵略され、また国内の反乱によつて土地を奪われたならば、どうして驚かずにいられますようか、どうして騒がずにいられますようか。

国を失ひ、家を滅びさせたら、いったいどこに逃れるところがありましょうか。一身の安泰を願うならば、まず何を おいても国土全体が無事で穏やかになることを祈らなければなりません。

ことに、人は誰でも死後のことを恐れるものです。そのために誤つて邪教を信じたり、あるいは謗法の教えを貴んだりしてしまふのです。その是非・善悪に迷ふことは憎むべきことですが、まだ仏法に帰依しようとする心はまことに哀れです。

どうして同じく信心をするなら、妄りに邪教の言葉を貴ぶのか。もし邪教にとられ心を改めず、間違つた考えがい つまでも残つているならば、早くこの世を去り、死んでのちは必ず無間地獄に墮ちるでありましょう。

なぜならば、

大集経には次のように説かれているからであります。

「若し国王があつて無量の過去世の間、布施・持戒、智恵の修行を積んでも、我が仏法の滅びようとするのを見捨てて、守護しないならば、それまで植えた無量の善根もすべて消滅してしまふだろう。

(中略) その王はやがて重い病氣にかかり、死後には大地獄に墮ちるであろう。王ばかりでなく、夫人も太子も大臣はじめ百官もそれと同じように大地獄に墮ちるであろう。」と。

仁王経囑累品にも次のように説かれています。

「仏教を破る人には親孝行の子は生まれません。親類じゆうと仲たがいで、天の神々も助けてくれない。病氣や悪鬼が日々襲ひ侵害し、怪しげな災難が生ずどこへ行つてもついてまわり、死んでからは地獄・餓鬼・畜生におちるであろう。たまたま人間と生まれても戦の奴隷となるであろう。

この世で作つた悪業はあたかも響きや身に添う影のように、また夜、灯の光で字を書いても、灯の消えた後も字は残るように、現世で犯した謗法の悪業の罪はこの様に消えないのである」と。

法華經第二に云く、
若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、乃至、其の人命終して阿鼻獄に入らん。

又同經第七卷不輕品に云く、
千劫阿鼻地獄に於いて大苦惱を受く。

涅槃經に云く、
善友を遠離して正法を聞かず、惡法に住せば、是の因縁の故に沈没して、阿鼻地獄に在つて受くる所の身形縦横八万四千「由延」ならん。

広く衆經を披きたるに、専ら謗法を重しとす。悲しいかな皆正法の門を出でて、深く邪法の獄に入る。愚かなり、各惡教の綱に懸つて、鎮に謗法の網に纏はる。此の濛霧の迷ひ、彼の盛焰の底に沈む。豈愁へざらんや。豈苦しからざらんや。

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壞れんや。国に衰微無く、土に破壊無くんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。此の詞、此の言、信ぜべく崇むべし。

客の曰く、
今生後生、誰か慎まざらん。誰か和まざらん。此の經文を披いて具に仏語を承るに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。

我一仏を信じて諸仏を抛ち、三部經を仰いで諸經を闡きは、是れ私曲の思ひに非ず、則ち先達の詞に隋ひしなり。十方の諸人も亦復是の如くなるべし。

今世には性心を勞し、来生には阿鼻に墮ちんこと文明かに、理詳かなり、疑ふべからず。彌貴公の慈誨を仰いで、益愚客の癡心を開き、速かに對治を廻らして、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ、更に没後を扶けん。唯我信ずるのみに非ず、又他の誤りを誡めんのみ。

法華經第二の卷の譬喩品には、次のように説かれています。
「もし人がこの經を信じないで毀るならば、《中略》その人はこの世の命終わつて無間地獄に墮ちるであろう」と

また同じく法華經第七卷の常不輕菩薩品には、次のように説かれています。
「千劫もの永い間、無間地獄にあつて大いなる苦しみを受ける」と。

涅槃經の迦葉品には次のように説かれています。
「善き師を遠ざけて正法を聞かず、惡法に執着するならば、その惡業によつて無間地獄に沈んで、無間地獄で八万四千由旬の広大な身体いっぱい、永久的に地獄の苦しみを受けるであろう」と。

このように多くの經文を開いてみますと、謗法の罪が最も重いとされています。悲しいかな、日本国の人びとがみな、正法の門を出て、深く邪法の牢獄に入っています。愚かなことに日本国中人々が悪い教の綱に懸かり、永く謗法の網に纏われています。こうした深い迷いによつて、地獄の焰の底に沈むのです。これを憂えずにいられますようか、苦しまずにいられますようか。

あなたは一刻も早く邪まな信仰を捨てて、ただちに唯一真実の教である法華經に帰依しなさい。そうするならば、この世界はそのまゝ仏の国となります。仏の国は決して衰えることはありません。十方の世界はそのまま浄土となります。浄土は決して破壊されることはありません。国が衰えることなく、宝土が破壊されなければ、わが身は安全であり、心は安穩でありましょう。この言葉を信じなければなりません、崇めなければなりません。

客はいう。
今生の安穩、後生の成仏を願つて、誰がそのために身を慎まないでしょうか。誰が心を碎かないでしょうか。今ここに示された經文を開いて具体的に仏の御言葉を承りますと、仏を謗り、經を謗る謗法の罪がいかに重く深いものであるかを知ることができました。

私が弥陀一仏を信じて諸仏をなげうち、浄土三部經だけを仰いで諸經を捨てたのは、私一個人の考えではなく、浄土宗の先師の言葉に随つたままであります。おそらく世の中のすべての人びともそうでありましょう。

現世ではいたずらに心を悩ませ、来世には無間地獄に墮ちるといふことは、經文に明らかで道理も明白であります。疑う余地はまったくありません。今後ともあなたの慈悲あふれる教を仰いで、私の愚かな心を開き、すみやかに謗法の者を根絶し、一日も早く天下の太平を実現し、まず今生を安穩に、そして更に未来の成仏を目指します。ただ私一人が信ずるだけでなく、他の人びとの誤りをただすことに努めたいと思いません。

安国論奥書

文応元年太歳庚申之を勘ふ。正嘉に之を始めてより、文応元年に勘へ畢んぬ。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月廿三日、戌亥の剋の大地震を見て之を勘ふ。其の後文応元年太歳庚申七月十六日を以て宿谷禅門に付して、故最明寺入道殿に奉れり。

その後、文永元年太歳甲子七月五日大明星の時、弥々此の災の根源を知る。

文応元年太歳庚申より文永五年太歳戊辰後の正月十八日に至るまで九ヶ年を経て、西方大蒙古国より我朝を襲ふべきの由、牒状之を渡す。又同六年、重ねて牒状之を渡す。

既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに未来も亦然るべきか。此の書は徴有る文なり。是れ偏に日蓮の力に非ず。法華経の真文の感応の至す所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

(この立正安国論は)

文応元年(一二六〇)に著述、公表したのである。(ただし、同書に主張したことを考え始めたのは)正嘉元年(一二五七)で、文応元年に完成したのである。

去る正嘉元年八月二十三日午後九時ごろの大地震を見て、これを契機として立正安国論を考えたのである。その後、文応元年七月十六日、宿屋入道光則を通じて、故最明寺入道時頼殿に献じたてまつったのである。

その後、文永元年(一二六四)七月五日に大彗星が現われた時、いよいよこの災難の根本的原因を確認することができた。

文応元年に立正安国論を献上してから九箇年を過ぎて、文永五年(一二六八)閏正月十八日に、西方の大蒙古国からわが日本国を襲撃するという牒状が来た。さらに翌六年にふたたび牒状がきた。

(九年前の立正安国論の)
勘文の通りになったのである。これによって思うに、未来もまた国難の起こることは必然である。この立正安国論は実に預言の書である。この予言が的中したのは日蓮の力ではなく、法華経の真実の経文の感応同交せるところか。

文永六年(太歳己巳)十二月八日、この立正安国論を写した。